

ベイビーブルー

岐阜高校 3年 薫田 明歩

「失礼しました」

頭を下げて職員室を出ると、もう夜の冷たい空気が校内に滑り込んできていた。

最終下校時刻はもうとうに過ぎていく。

人気のない廊下をパタパタとわざとらしくスリッパを鳴らして歩き、教室に向かった。

明日の朝、この街を出る。

父親の転勤先は、今いるここからは電車で半日もかかる遠い遠い、僕が知らない街。

海のある街だそうだ。

夜の教室は昼間とは違う雰囲気で、少し寒かった。

自分の席に座り、机の中で化石になっていた教科書やプリントをカバンに詰める。明日のこの時間にはもう、全く知らない土地の空気を吸っているのかと思うとなんだか不思議な気持ちになった。僕は本当は海があまり好きではない。このままここにいたいと思った。

古いプリントをぼんやりと見返していた時、教室の後ろのドアが開く音がした。

振り返ってみると、同じクラスの吉野さんがいた。

たしか彼女と話したのは、一年くらい前に僕が絵のコンクールで佳作をとった時。それまで一度も話したことがなかった彼女が、いきなり近づいてきてすごいねと言ったのだ。僕は驚いて、早口にありがとうと言いなからその場を逃げるように離れてしまった。もうきつと彼女は覚えていないだろう。今思えば、彼女とは一年生の時からクラスが同じだったのにその時くらいしかろくに話したことがなかった。

吉野さんは僕を一瞥したが、何を言わずに教室に入ってきて、自分のロッカーの中を探った。

忘れ物をしたのだろう。

仲が良かったわけではないし、声をかけることもない。きつと彼女も同じように思っている。

「どんな街に行くの？」

やっと机の中の荷物を整理し終わった頃、後ろから声をかけられた。振り向くと、彼女が近く立っていた。

「海のある街だよ。」

突然話しかけられたから、びっくりしてぎろぎろに答えてしまった。

「海かあ、いいな」

彼女は適当な声の調子で言った。

「うん」

僕たちがいる街に海はない。

「魚がきつとおいしいね」

「そっか、おいしいな」

僕は海も魚も嫌いだ。

吉野さんと僕はずっと互いの世界の外側にいた。

固い確執はない。水と油の境目はいつだって穏やかな曲線を描いている。

でも混ざり合わない。教室という小さな入れ物の中に一緒にいても。

今日のこの記憶も、きつと泡となってすぐに消えてしまう。

その後、見回りに来た宿直の先生に注意されたので学校を出た。外はもう真っ暗だった。校門を出て歩き始めると、吉野さんは私ごっちだから と僕の帰り道とは反対を指した。

「そっか、じゃあね」

「うん、じゃあ」

彼女と別れて歩き始めると、僕はなんだか深くて暗い海におちたような気分になった。冷たい水が心に沁みてきて、胸が痛くなった。

明日。

明日僕が知らない街に行ってしまうてもみんなは、今日みたいに、昨日みたいに、今まで通りこの街で時間をなぞり、息をする。

僕は急に知らない街に行くことが怖くなった。みんなが僕だけいない世界で普通に生活していくことを考えると悲しかった。自分だけが一人ぼっちになってしまう気がした。黒い海の水はどんどん僕を飲み込んでいった。今まで心の底に潜在していた不安が一気に膨れ上がって气道を塞いだ。重たくて苦しい。いきができない。

つらくて歩く足を止めそうになったとき、深い海の底でバタバタと荒い足音を聞いた。

「あー！」

重い水を切って振り向くと息の荒い彼女がいた。

「吉野さん」

声がうわずってしまった。

「泣いてるの？」

はっとした。一気に海から引き上げられた。

「泣いてない」

腕で乱暴に鼻をぬぐうふりをして、目にたまった滴をはらった。

「帰ったんじゃないの？」

「私 君にずっと言いたいことがあったのを思い出した」

僕はなんと答えていいかわからなくて黙っていた。

「一年の時、絵で賞をとっていたよね」

驚いた。覚えていたんだなと思った。

「私、その時まで絵なんか興味なかったんだけどね、偶然 君のその絵を見て、運命みたいになにか感じたんだ ビビビって なんか言葉ではうまく言えないんだけど」

「うん」

驚いた。彼女にとって僕はただの油ではなかったらしい。

そんなふうに思ってもらえていたことは嬉しかった。

でも ありがとうという言葉は、握った拳の中で砕けて、うん と答えるのがやっとだった。

「それで私、絵描きははじめたんだよ 結構うまくなったの」

彼女は少し照れくさそうに笑っていた。

「今度見せてよ」

僕もなんだか照れくさくなってしまつて、少しもった。

「もっとうまくならね」

海の水で冷えた体が温まつていくのを感じた。

「あの絵、街の公民館にまだ飾つてあるんだよ もう日に焼けてかなり古びてしまつたけど」

「とくに捨ててしまわれたと思つたよ」

そう言い終わると、なぜだか胸がいつぱいになった。

僕は明日の朝、この街を出る。

「もう帰らなくちゃ」

「うん 気を付けて」

帰っていく彼女の背中からふと空に目を移すと、夜の濃い藍に目が痛くなつて 少し涙が出た。